



特別講演会

# 「夢あふれる医療者になろう！」

～医療に関わる職種の多様性・多職種による連携の実際を知る～を開催しました



去る2月20日（月）、いわき明星大学 AV 講堂において、かしま病院主催の特別講演会「夢あふれる医療者になろう！」が開催されました。

医療関係者や医療職に興味を持つ小学生から大学生及び看護学生など幅広い年代から約200名が出席し、医療職者を養成していく上での様々なカリキュラムや工夫、いわき地域における多職種連携やチーム医療の必要性などについて、熱心に話を聴いていました。

2部構成の第1部では、聖マリアンナ医科大学学長の三宅良彦先生が「医学部の立場から」、いわき明星大学学長の山崎洋次先生が「薬学部・看護学部の立場から」、それぞれ基調講演を行っていただきました。

第2部のパネルディスカッションでは、「医療系職種を目指す君たちへ」と題し、座長に高知医療再生機構理事長の倉本秋先生をお迎えし、三宅良彦学長、山崎洋次学長に、いわき明星大学准教授の吉川真一先生、磐城共立高等看護学院教務主任の高木文子先生を加えた4名のパネリストからお話頂きました。



聖マリアンナ医科大学学長 三宅良彦先生



いわき明星大学学長 山崎洋次先生



第1部座長 養生会理事長 中山大



パネルディスカッション



高知医療再生機構理事長 倉本秋先生



いわき明星大学准教授 吉川真一先生



磐城共立高等看護学院教務主任 高木文子先生

## 呼吸器科診療の地殻変動 渡り歩いて来て

医学の進歩は目覚しく、10年前の知識はいつまでも通用はしません。患者は前期高齢者になりましたが、今でも嘱託常勤医として患者さんを担当していますので、医学の進歩に追いついていかないと患者さんに迷惑をかけることとなります。そのため、時々老骨に鞭打って学会や研究会に出かけ福島や仙台、時に東京詣でをして知識を吸収しています。



腔鏡下手術はやがて肺癌の手術に応用されるようになり、今では呼吸器外科の手術の大半は胸腔鏡を活用しています。完全胸腔鏡下に数センチの創で肺癌の根治手術も可能になりました。  
患者は12年前からかしま病院にお世話になり呼吸器内科医に転じました。ここ数年、肺癌の内科治療に地殻変動が起こっています。遺伝子解析を駆使した分子標的治療の進歩です。いろいろな薬が開発され、肺癌を遺伝子的にいろいろなタイプに分類し、一人ひとりの患者さんのタイプにふさわしいオーダーメイドの治療が可能になってきました。

肺気腫という病気があります。喫煙などで肺が壊され膨らみすぎて風船のようになり、ちよっと動くだけでも呼吸が苦しくなる病気です。COPDとも呼ばれます。20年数年前のことですが、この治療に胸腔鏡下レーザー治療が有効だということで大ブームになりました。膨らみすぎた肺をレーザー光線でしぼませて小さくすれば息がしやすくなるという発想です。さらに、いっそ一部切除して肺を小さくしても有効だろうと考えるようになりまして。肺容量減少手術です。この治療は一時爆発的に流行しました。当時、中堅から若手の呼吸器外科医は国立がんセンターにしばしば足を運び、成毛昭夫先生を師と仰ぎ一生懸命胸腔鏡下手術の知識と技術を吸収しました。呼吸器外科医であった20数年前の熱気が思い出されます。

テレビなどでも「変貌する肺がん治療」が大大的に喧伝され、夢のような治療が現実味を帯びてくるようになりまして、医療者としてうかうかしていられず医学の進歩に追いつくのがやっとなです。遺伝子解析はほとんど複雑化し人智では処理できなくなりそうです。やがては、最適の治療薬を決めるために、AI（人工知能）に頼るようになりそうです。

肺容量減少手術では術後数年間は呼吸が楽になりましたが、その後、元に戻って呼吸が苦しくなることが判明したため、やがてブームは去りました。肺気腫の手術は消えましたが、これをきっかけに発展した胸

そのための医療のコストは高くなり医薬品も高騰化しています。免疫チェックポイント阻害薬にいたっては、1年間に3500万円も掛かるような薬が使用されるようになり、国家財政を減ぼしかねないと社会問題になりました。今年になって、薬価は半額になりましたが、それでも年間1750万円です。一人の患者さんが1年間に得られる収入を遥かに超える金額です。生命の価値は地球よりは重い、と思われていますが、どこまで医療費がかけられるか真剣に考えないといけない時代になりました。

(呼吸器科部長 山根喜男)

